

# 漢字に親しみ、適切に活用することのできる児童の育成 ——『正色漢字辞典』づくりを通して——

名古屋市立 正色小学校 山本 小夜子

## 研究成果要約

### 1. 研究活動の概要

本校における3年間の取り組みのまとめである。「自分漢字辞典」「自分漢字ドリル」の作成と日本漢字能力検定の受検でついた自信を『正色漢字辞典』という形にまとめた。

学年の配当漢字1006文字を全校児童139人で分担し、書き順、部首、例文、なりたちなどのレイアウトを考え、適切に活用することができるように工夫した。㊦マークを入れ、書き込みながらドリルのように学習を進めることができる。さらに、付録として、「正色漢字ドリル」「正色漢字検定」「コラム」などを載せ、これ1冊あれば、小学校の配当漢字全てを繰り返し学習することができる。

また、完成した『正色漢字辞典』を使って、「辞書引き学習」に取り組みさせる。そのために、段階に応じて付箋を貼っていくような工夫をした。漢字への関心をさらに高め、『正色漢字辞典』に書き込みながら語彙を増やして正しく活用することで、より良い人間関係の構築ができると確信している。

### 2. 研究成果の概要

成果物として、『正色漢字辞典』が完成した。各学年順に配当漢字を載せるにあたり、学年の扉と学年の漢字コーナーをカラーで付け加えた。各学年、今年度のよい思い出とともに、一緒に『正色漢字辞典』をつくった仲間が分かり、漢字以外でも努力の成果を実感できるようにした。

完成した『正色漢字辞典』を手にとった子どもたちは、大満足であった。この『正色漢字辞典』を使って、既に、春休み中から既習漢字の練習に熱心に取り組んでいる子、また来年度の「日本漢字能力検定」に向けての学習を始めている子がいる。

### 3. 成果活用について

完成した『正色漢字辞典』は、「小学生がつくった 小学生のための漢字辞典」である。小学生が自分たちのためにつくった漢字辞典を多くの大人が手に取り、今までにないこの取り組みに、大人も驚いている。

しかし、この『正色漢字辞典』、実は未完成である。子どもたちが学習を進める中で、文章や熟語を書いたり、他の知識を書き加えたりしながら、一人一人が自分だけの漢字辞典をつくっていくことができるように構成されている。漢字辞典だけな

く、読み物として、またドリルとしてオリジナリティにあふれた使い方を期待している。

#### 4. 今後の研究課題

今後は、自分の漢字辞典をつくりながら自ら学びの扉を拓くことで、「ことばの力」を育成していきたい。読み、書き、話し、考え、自分の思いを表現したり、友達の思いを理解したりできる力を身に付けてほしいと考えている。

## 研究成果報告

### 1. はじめに

#### (1) 背景

「名古屋市学習状況調査」国語科において、「書くこと」および「言語事項」、とりわけ「漢字の読み書き」「辞書の活用」の定着が急務であることが、これまで指摘されてきた。本校も例外ではなく、4年前から分からない言葉や漢字を辞書で調べたり（辞書引き学習）、覚えた漢字を日常の中で活用する場を意図的に設定したり（作文指導、委員会活動など）した。また、学校図書館を中心にした児童を取り巻く言語環境を整備したりして、「ことばの力」で自ら学びの扉を拓き、情報を得て、思考を深めることのできる児童の育成に取り組むことにした。そのために、継続的に2年間、辞書引き学習と併せ、以下のような取り組みを行った。

#### (2) 24年度、25年度の2年間の取り組み

○漢字の成り立ちや由来、不思議に関心をもたせる授業の段階的な位置付け

まず、各学年に以下のように、授業を段階的に位置づけた。

- ・1年生：象形文字や指示文字の成り立ちに興味をもたせる。
- ・2年生：会意文字や形声文字の成り立ちに興味をもたせる。
- ・3年生：部首が漢字の意味と深い関わりがあることに興味をもたせる。
- ・4年生：漢字や慣用句を使った短文作りに興味をもたせる。
- ・5年生：同音異義語や熟語、熟字訓に興味をもたせる。
- ・6年生：形声文字の成り立ちや音の共通部分に気付かせ、漢字の世界を広げさせる。

#### 〈授業の工夫〉

漢字に親しみ、適切に活用しようとする児童の育成を目指し、職員全員で漢字への興味が高まる授業のあり方を追究した。また、児童の手元に常に辞書を置かせ、校歌や昔話に出てくる言葉の意味を調べたり、「自分漢字辞典」や「自分漢字ドリル」を自作したりする活動を行った。また、「日本漢字能力検定」受検に向けての授業を保護者に参観してもらった。



自分漢字辞典づくりへの取り組み

○一文字に思いを込めて

- ・行事ごとに自分の意気込みや願いを漢字一文字で表し、展示した。運動会では、万国旗の代わりに全校児童、教職員で作成した旗を飾り、保護者、地域の方に見ていただいた。その他、創立140周年記念式典、学芸会、展覧会、卒業式など行事でも発表した。
- ・修学旅行では、事前に自分の好きな漢字を色紙に墨で



140周年記念式典にて

したため、毎年、年末の「今年の漢字」で有名な清水寺で記念撮影をした。

- ・「今、あなたに贈りたい漢字 コンテスト」(日本漢字能力検定協会主催)に応募した。漢字の意味を理解し、その一文字に込められた心が相手に伝わるようにメッセージを添えた。それを、展覧会の時に全校分土間に掲示した。さらに、漢字を贈った大切な人と一緒に来校した場合、その漢字を缶バッジにしてプレゼントした。

また、全校で「今年の漢字」を予想し、話題となった漢字に応募するという取り組みも、漢字への関心を高める大きなきっかけとなった。



清水寺にて思いを一文字に

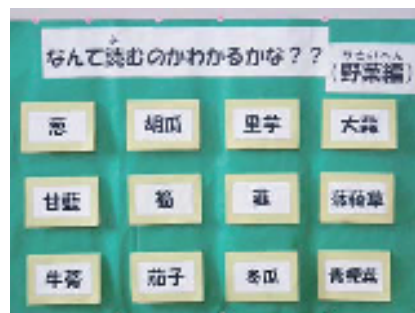


### ○漢字に親しみながら楽しく成果を実感できる工夫

〈委員会活動の工夫〉

各委員会独自の漢字クイズをつくり校内に掲示した。例えば、保健委員会は肋(あばら)や睫(まつげ)などのクイズを保健室の前に、飼育委員会は、漁師町一色にちなんで魚偏の漢字を集めたクイズを自然観察園に掲示した。

給食委員会は、いろいろな野菜の読み方を調べ、調理場の近くに掲示した。



給食委員会の掲示

学校中に貼られた珍しい漢字に、どの学年の児童も大変興味をもち、まるで漢字博士になった気分を楽しんだ。

〈学校図書館の整備・充実〉

児童を取り巻く言語環境の一つとして、学校図書館を改装(平成24年度)。それとともに、教科書に紹介されている本を全て廊下にそろえ、いつでも自由に手に取って読むことができるようにした。また、休み時間を活用して、教員や保護者のボランティアによる「読み語り会」を行い、季節や児童の実態に応じた本を子どもたちに読んで聞かせた。



### ○各種実態調査の結果

「日本漢字能力検定」平成24年度合格率……79.3%

「正色漢字検定」25年度第1回合格率……74.5%

「日本漢字能力検定」平成25年度合格率……94.2%（優秀団体賞 受賞）

「日本漢字能力検定」平成26年度合格率……84.2%

- ・平成24年度、25年度の「標準学力調査」では、全学年で国語力の向上が見られた。昨年度と比べ、10点以上伸びた学年もあった。
- ・観点別では、「言語についての知識・理解・技能」の定着率がどの学年も高く、それを活用する力も身に付いてきた。
- ・平成26年度の「日本漢字能力検定」では、上の級を受検した子どもが多くいたので、意欲の高まりがみられた。

### (3) 『正色漢字辞典』づくりと期待効果の仮説

前述のように2年間研究・実践を継続してきた総まとめとして平成26年度は、『正色漢字辞典』の作成に取り組むことにした。この取り組みをすることで、児童が漢字だけではなく「ことば」を意識するようになって考えた。適切に漢字を使いながら、生きて働く「ことばの力」を高めることができると考える。

この『正色漢字辞典』は、未完成で製本する企画である。平成27年度、児童が学習を進める中で、文章や熟語を書いたり、他の知識を書き加えたりしながら、一人一人が自分だけの漢字辞典をつくっていくことができるようにしていきたい。漢字辞典だけでなく、読み物として、またドリルとしてオリジナリティにあふれる使い方を期待している。そして、この『正色漢字辞典』を活用しながら学習を進めることで、「ことばの力」が高まり、言葉による思考力、判断力、表現力の育成につながるものと考え。



## 2. 「正色漢字辞典」づくり

### (1) 対 象

名古屋市立正色小学校 全校児童 139名（男子67名、女子72名）

教職員 17名（内、教員11名、学級担任6名）

### (2) 準 備

『正色漢字辞典』づくりの組織

【推進委員会】（適宜、必要に応じて開催）

学校長 教頭 ※総括

教務主任（推進委員長） 校務主任 ※各学級への指導、業者交渉、点検など

【低・中・高学年部会】（3部会で情報交換）

各学級担任 本校職員 ※子どもへの指導、漢字辞典づくりへの参加

## (3) 実 践

推進委員会	学年部会
<p>第1回 推進委員会〈7月10日(木)〉 『正色漢字辞典』作成の進め方について話し合い、見通しを共通理解した。</p>	
<p>全体会 〈7月17日(木)〉 『正色漢字辞典』づくり開始にあたって、組織と進め方、タイムスケジュールについて伝えた。実物がないため、各担任からは「ゴールがイメージできない」という意見が出た。 よって、業者との詳細な打ち合わせを行い、構成の具体化に努めることにした。</p>	
<p>※教務、校務 複数の業者への見積もりの依頼。 学年配当漢字1006字を、全学年児童と教職員に割り振った。1年生は、発達段階を考え2文字担当にした。また、学年内での漢字の分担数が均等になるように、学年の枠を超えて各学年で分担する漢字を決めた。 足りない分は、教職員に割り振った。</p>	<p>※各担任 夏休み前に各児童に漢字を割り振った。1年生は1文字。2年以降は、7～8文字になった。名前の漢字を選ぶ子や、好きな漢字など、児童が必要な数を順番に各学級で選んでいった。 また、児童に自分の分担漢字について、夏休み中を利用して取材するように指導した。 (今までの自分漢字辞典を参考にさせた) ・夏休み中 各学年ごとに、配当漢字をどのように漢字辞典にまとめるとよいかの素案を考えた。</p>
<p>全体会 〈8月22日(金)〉 中部大学准教授 深谷圭助氏を講師に招き、漢字辞典づくりのポイント、子どもたちへの働きかけ方、漢字の読み方などについて研修を行った。 計画が大きすぎて、学級担任の中にはイメージができない者もいたが、これによって取り組みへの共通理解が図れた。また、早急に業者との打ち合わせが必要であることが分かった。</p>	
<p>第2回 推進委員会〈8月29日(金)〉 数社の見積もりを参考に依頼業社決定。 ※教務、校務 (9/1) 〈業者との打ち合わせ〉 一般的な出版物についての作業の進め方について説明を聞いた。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>製本までの流れを確認 ・原稿用紙(1文字1枚B4サイズ)は、業者が用意。 ・レイアウトは学校で決める。 ・タイムスケジュール詳細確認 ・ページの割り振りについて ・漢字以外の掲載内容                      など</p> <p>※教務、校務 1文字についての掲載内容について相談。読み、部首、書き順は必須。言葉として文の中で適切に活用することが目標であることから熟語、短文も掲載することにした。 また、読み物や学習帳としても活用することができるように㊦マークをつけて楽しめるようにしよう、ということにした。</p>	<p>第1回 各学年部会〈9月1日(月)〉 低・中・高学年部会に分かれて、夏休み中の児童の取材の進捗状況を確認。以下のことが分かった。 ① 低学年は筆圧が安定しないため、きれいに書けない。 ② 保護者の協力があると、1文字の情報内容、情報量ともにより充実する。 ③ 写真を効果的に使うと、楽しく取り組める。 ④ 全校で統一しなければいけないことがたくさんある。 ・音はカタカナ、訓はひらがな ・送り仮名の表記の仕方 ・ふりがなはどうするか ・㊦マークはどこにつければよいのか</p>

**全体会〈9月2日（火）〉**

低・中・高学年部会で出された検討事項と、教務、校務で考えた1文字についての掲載内容をすり合わせ、どのようなレイアウトの原稿用紙が必要か相談した。

また、漢字以外にも、漢字辞典の特色や使い方、索引など掲載することがあるため、その部分を誰がどのように進めていくのかについて相談した。

**第3回 推進委員会〈9月4日（木）〉**

1文字の漢字のレイアウトは自分漢字ドリルをもとに決定。その他のページについても相談した。

決定は金額との関係で今後要相談。



※教務、校務（9/7）  
〈業者との打ち合わせ〉

決定したレイアウトを基に、専用の原稿用紙を至急作成するように依頼。

今後、「辞書引き学習」を進めることも考えて、さらに付箋を貼る部分もレイアウトの中に入れることを伝えた。



漢字ページ用の原稿用紙到着  
タイムスケジュール確認

- ・1006文字は11月中に第1稿完成。12月は教務、校務で誤字・脱字チェックをする。
- ・その他のページについては、大人が作成をするため、2学期中に完成。
- ・12月24日に業者に原稿を渡す。
- ・1月8日にゲラとして業者から戻る。
- ・ゲラチェックを業者との間で3回繰り返し、3月に印刷開始、3月16日に納品予定。

※教務、校務（10月～）

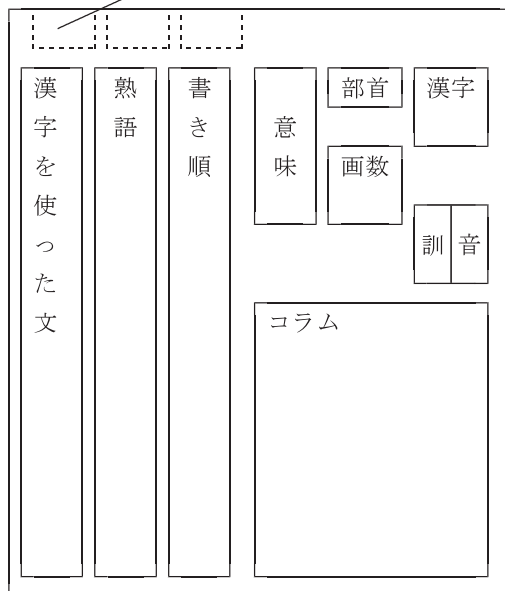
できあがった原稿から確認に入った。

しかし、担任の一斉指導では、書き順の間違いがしばしば見られた。

また、次の点が問題となり、考えた。

- ① 読み方はどこまで書くのか。  
特別な読み方まで書くには、原稿の欄が小さい。
- ② 部首の名前がいろいろあった。同じ部首は統一したい。

付箋添付箇所



大まかなレイアウト

※各担任

早速、夏休みの取材を基に各自1文字練習させた。時間は、20分の朝学の時間を使った。学年によってかかる時間がかなり違うことが分かった。

**第2回 各学年部会〈9月30日（火）〉**

運動会が終わったところで、部会ごとに進捗状況を確認。1年生はまだ漢字の学習に取りかかったところなので、2学期後半に取り組みことにした。

他の学年も運動会の練習で2枚が限界だった。鉛筆で濃く書くか、ペンで清書するかも話題に上がったが、消しゴムでたびたび消すのでやはり鉛筆で書くことで共通理解を図った。

※各担任

共通理解がさらに必要なため、いったん原稿作りを中断。その間、お楽しみコーナーのネタ探しを依頼した。ちょうど展覧会の作品作りに

- ③ 止め、はね、払いが丁寧に書けてない原稿が気になる。
- ④ 筆圧が弱かったり、硬い鉛筆で書くと、字が薄くて原稿にならない。
- ⑤ 低学年の読み仮名が小さくてつぶれてしまっていて読みにくい。

取りかかり始めたところだった。それぞれ力作に挑戦しながら、何とかこの展覧会の思い出などを辞典に載せる工夫はないかと、各自が考えた。

#### 全体会〈10月9日(木)〉

教務、校務が、早い段階で原稿をチェックした結果出てきた問題点を全体会で伝えた。また、各学年も困っていることを伝えた。

全体会の場で対策を考え、次の共通理解をした。

- 学年の扉をカラーページにして、児童の集合写真を載せる。
- 学年の終わりのページにも、展覧会の作品など担任が載せたいと考えている内容をカラーで載せる。ただし、漢字に関係するように工夫すること。
- 読みは、習った読み方から書ける範囲で書く。送り仮名の書き方も統一。特別な読み方は、最後に中学生で学習する漢字のコーナーを設けて掲載する。
- 部首の名前は、教務、校務で統一して示す。
- 基本的に、清書のつもりで丁寧に書かせる。
- 2B以上の鉛筆を使う。ただし、手で擦れて原稿が汚れる可能性もあるので、気を付けて書くよう指導をする。
- 小さな文字を書くことができない児童の読み仮名は、担任が書く。

など



#### ※教務、校務 (10/14)

〈業者との打ち合わせ〉

中にカラーページや漢字以外のページを入れたいと伝え、再度、総ページ数とカラーページ数を考えて見積もり依頼。

業者の返答。574ページ。カラーは20ページ程度。データ読み取り、印刷、製本全て含めて180冊、50万円。

#### ※教務、校務 (11月～)

次々とできあがってくる原稿を細かくチェックした。担任は、書かせる指導に精一杯のため、誤字・脱字など見つけたら、個別に呼び、教務、校務で指導して直させた。

#### ※教務、校務 (12月～)

ページの割り振り詳細と担当打ち合わせ。  
・表紙(カラー)……全校児童の写真

#### ※各担任

共通理解を図ったところで、再度原稿の指導を再開。丁寧に書かせるのはなかなか難しく、苦戦したが、根気よく、合間の時間を有効に活用し、個別指導もしながら進めた。

#### ※各担任

お楽しみコーナーにクイズや成り立ちなどを載せるということで、各学級、付箋をたくさん貼った辞典を机の上に置き、ゲームをしながらネタ探しなどに取り組んだ。



#### ※各担任

12月には、書写の時間を活用して、1年生が2文字の漢字に真剣に取り組んだ。

各学年3学期までの新出漢字の学習を終え、1月に受検する「日本漢字能力検定」の学習に取り組み始めた。



- ・見返し……2色刷り。教員が学校の絵を描き、漢字を入れる。
- ・見返し裏……白紙
- ・扉（カラー）……教務担当
- ・はじめに……校長担当
- ・特色と使い方（3ページ）……校務担当
- ・総画索引（1006字で3ページ）……校務担当
- ・1年……扉、目次など含め44ページ
- ・2年……扉、目次など含め84ページ
- ・3年……扉、目次など含め104ページ
- ・4年……扉、目次など含め104ページ
- ・5年……扉、目次など含め97ページ
- ・6年……扉、目次など含め95ページ
- ・正色漢字ドリル（自分漢字ドリル）
- ・正色漢字検定（答えも含む）
- ・中学3年間で習う漢字……校務担当
- ・コラム……教頭担当
- ・奥付……教務担当
- ・見返し……2色刷り。教員が学区の絵地図を描き、漢字を入れる。

さらに漢字に興味が出てきた児童は、漢字辞典づくりの最終段階。自分で自分の原稿をチェックすることが、「日本漢字能力検定」受検の学習にもつながることを伝えながら指導した。

**全体会〈12月15日（月）〉**

教務と校務で考えたページの割り振りを全員に示した。それを基に、各自が冬休み中に取り組むことを確認し、校長、教頭に改めて担当ページの原稿執筆を依頼した。

**※教務、校務（12月15日～）**

二人で、何度も原稿チェックを繰り返した。さらに、24日に業者に原稿を渡すために、写真のデータを整理した。

また、最終チェックとして、教頭、校長にも原稿の確認を依頼し、直すべきところは個別に呼んで、教務、校務のもとで直させた。

**※各担任**

漢字以外に、学年の扉や思い出のページ、目次などを整理し、原稿に仕上げた。

繰り返し、間違いはないか各自、自分の学年を何度もチェックした。

**第4回 推進委員会〈12月18日（木）〉**

業者へ24日に原稿を渡すための段取りを確認した。また、3学期以降、「日本漢字能力検定」受検に向けての指導と並行したタイムスケジュールをたてた。

**全体会〈12月19日（金）〉**

これまでの取り組みの成果をまとめ、1006字分と学年の扉、思い出のページを並べ、9ページ～538ページの原稿を第1稿として業者に提出することを報告した。また、表紙と裏表紙に載せる写真はこれでよいかという確認をとった。

24日にこれら全てを業者に渡すこと、さらに、全てのページをコピーして冬休みに分担してチェックすることにした。その際、各部会で互いの学年の原稿を見る方がよいのではないかという意見が出され、休み中各部会でコピーを交換してチェックすることにした。また、大人の分担ページにも取り組むよう伝えた。

※教務、校務（12/24）

〈業者に原稿を渡す〉

ここまでできあがった原稿を業者にそのまま渡した。次回、これを縮小、レイアウトして、1月16日にゲラが仕上がる。

さらに、ゲラを3回やりとりするための日程調整をした。



製本はされていないため、まだばらばらの状態である。これをさらに学年ごとに分けて、3回チェックを繰り返した。修正があれば、原稿を直接直した。

第1稿できあがってきたゲラ

このゲラのチェックを何度やっても間違いが見つかる。そこで、より多くの目で、書き順、読み、ふりがななど焦点を絞って全教職員で繰り返しチェックした。それでも、業者と何回もやりとりするたびに間違いが見つかり、その都度直した。

※教務、校務（1/30）第2稿受け取り

ゲラチェック

※教務、校務（2/3）

〈業者との打ち合わせ〉

すぐに業者を呼んで、第3回各学年部会で出た意見を伝え、対応できる限りデータの差し替えをすることにした。また、間違いに関しては、奥付に一言添えることにした。

※教務、校務（2/9）第3稿受け取り

ゲラチェック

この時点で、任せっぱなしにしてあった大人のページに意外と間違いがあることに気づき、慌てて大人のページを確認した。また、表紙から裏表紙まで中身、574ページ分を並べ、目次と合っているか照合した。

第3回 各学年部会〈2月2日（月）〉

ゲラができあがるたびに、より良い辞典にしたいという思いが高まっていき、以下のような意見が出された。

- ・「辞書引き学習」の写真、漢字資料館を見学している写真、今年の漢字「税」を当てた人の写真などを載せたい。
- ・運動会で作った漢字の旗を載せたい。
- ・表紙の全校写真の内、一人の児童の顔が隠れている。
- ・学区の絵地図に、建設中の橋も載せたい。
- ・最終的に印刷してから間違いが見つかったらどうするのか。

2月6日（金）

全校「日本漢字能力検定」受検

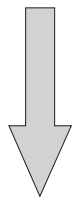
※教務、校務（2/18）校了

最終チェックで間違いがなければ印刷に取りかかる。チェック終了。



印刷日は、3月4日と決めた。

発行日は、卒業式前日、実際に児童に配付する日と決めた。



※各担任

漢検受検も終わり、原稿チェックに熱が入る。間違いを見つけたら、すぐに児童に直させる。毎日の授業の合間の時間を上手に使うって繰り返しチェックした。



「小学生がつくった 小学生のための漢字辞典」完成 3月18日（水）

**全体会〈3月19日(木)〉**

立派に完成した『正色漢字辞典』を児童に配付。皆で労をねぎらうとともに、来年度、この辞典をどのように活用し、学習を進めるのが検討課題であることを、共通理解とした。

**(4) 中部大学准教授 深谷圭助氏からのご指導・ご助言**

7月10日(木)

漢字を適切に文中で活用できる力を付ける、漢字に興味をもちながら漢字辞典をつくるための指導の進め方について話をしていただいた。今使っている辞書を、「辞書引き学習」で徹底的に読み込むこと、また視写や日記などで文中での活用方法を繰り返して指導すること、まずは、大人が楽しみながらすることを教えていただいた。

8月22日(金)

教師自身が鉛筆を持ち、原稿用紙に向かって一定時間文を書く練習をした。集中すると、鉛筆がコツコツと音をたてるのが聞こえる。頑張ってたくさん書こうとするほど、漢字の数が減っていくことがよく分かった。漢字に関心を高めながら辞典づくりに取り組むことが大切であることがよく分かった。そのためには、漢字辞典づくりだけしていてもいいものにはならないと気付かされた。

10月20日(月)

『正色漢字辞典』づくりのための、具体的な注意事項を教えていただいた。

例えば、「谷」という漢字は、関東圏以北は「や」と読むが、関西・中部は「たに」と読むことが一般的である。つまり、漢字の成り立ちや、生活に関わってくる。どの読みや意味を辞典に載せるかをしっかりと考える必要がある。

### 3. 考 察

原稿には何を載せるかから考え、何度も校正を重ねた。児童が書いた字が薄かったり、間違えていたり、読めなかったりしてなかなか原稿が仕上がらなかった。

そんな中、担任は根気よく指導を繰り返した。児童は、原稿を見ながら必死に修正を繰り返した。全教職員で、幾度も幾度もチェックを重ねた。そのうち、ゲラができ少しずつ完成に近づいていくことを実感し、さらにより良いものにしたいという熱意が全校にあふれた。また、大人も自分の担当ページを楽しみながら作成した。

その結果完成したのが『正色漢字辞典』である。全校児童、教職員が手にしたときの感動は大きかった。また、完成した漢字辞典を手にとった深谷圭助氏からも、お褒めの言葉をいただいた。

全校児童、全教職員の努力の賜である。

### 4. 結 論

「自分たちで使える漢字辞典を作成する」という企画を出したとき、「そんなことできるわけ

がない」とだれもが思った。しかし、始めてみると、深谷圭助氏のご指導の通り、「大人がまず漢字に興味をもつ」「大人が楽しむ」ことがいかに大切であるか分かった。そして、本校17人の教職員がその気になったら、児童も楽しく取り組めるということがよく分かった。その気持ちが全校で一つになれば、夢のような話の実現する。

さらに、その焦点が漢字であることが、漢字辞典づくり以外にも、漢字への関心を高めることができた。各委員会では、楽しい読み方をいろいろ掲示した。学年によっては、学校図書館で調べてだれも読めないだろうという漢字を探し、クイズ形式で掲示して全校生徒を楽しませる活動も見られた。漢字への関心が高まるにつれて、「日本漢字能力検定」受検への関心も高まり、該当学年より上の級を受検する児童が増えた。中には、5年生で4級に合格した児童もいた。

日頃から、漢字への関心を高め、正しく覚えて書くという習慣が今回の取り組みでさらに高まったということがはっきりと分かった。

## 5. 展 望

完成した『正色漢字辞典』をいかに活用するかが最後の全体会で話題にあがった。

早速、持ち帰った児童は、春休みに既に習った漢字のページを熟読して、たくさんの付箋を貼って、新年度うれしそうに持って登校してきた。

今回作成した『正色漢字辞典』は、書き込みしながら学ぶことができるように工夫されている。それをうまく活用しながら、自分たちで学習を進めていくことができる。つまり、未完成の『正色漢字辞典』をそれぞれの進め方で完成させていくことになる。自分の苦手な漢字から取り組む児童や国語辞典を開きながら熟語ばかり書き込んでいく児童もいる。興味を広げながら、また友達の取り組み方を参考にしながら、完成した感動が冷めないうちに、楽しく漢字を学び続けられるように時間を与え、支援、声掛けを続けていきたい。

さらに、今年度は、3年間で高めた語彙力を生かし、「ことばの力」を信じて、思考力、判断力、表現力を高めていけるよう研究を進めていく。テーマ「ことば つながる 響き合う」。言葉で互いに学び合えることを期待したい。